

日蓮大聖人御書全集

どうしょうどうみょうごしよ

同生同名御書

新版
1518
〜
1519

同生同名御書

ぶんえい ねん がつ さい きちげんによ

文永9年(72) 4月 51歳 日眼女

おおやみ 破 によにん こころ おおやみ ほけきよう

大闇をば日輪やぶる。女人の心は大闇のごとし、法華経

にちりん おさなご はは 知 はは おさなご 忘

は日輪のごとし。幼子は母を知らず、母は幼子をわすれず。

しゃかぶつ はh によにん おさなご ふたり 互 おも

釈迦仏は母のごとし、女人は幼子のごとし。二人たがいに思

離 ひひとり おも ひひとりおも

えば、すべてはなれず。一人は思えども一人思わざれば、

会 ひとり おも ひとりおも 思 者

あるときはあい、あるときはあわず。仏はおもうものご

によにん 思 者 ほとけ 思 者

とし。女人はおもわざるものごとし。我ら仏をおもわば、

しゃかぶつみ たま

いかでか釈迦仏見え給わざるべき。

石いしを珠たまといえども珠たまとならず、珠たまを石いしといえども石いしとな

らず。権経ごんきょうの当世とうせいの念仏ねんぶつ等は石いしのごとし。念仏ねんぶつは法華経ほけきょうぞ

と申すとも、法華経ほけきょう等とうにあらず。また、法華経ほけきょうをそしると

も、珠たまの石いしとならざるがごとし。

昔むかし、唐国もろこしに徽宗皇帝きそうこうていと申せし悪王あくおうあり。道士どうしと申すもの

にすかさされて、仏像ぶつぞう・経卷きょうがんをうしない、僧尼そうにを皆還俗みなげんぞくせし

めしに、一人いちにんとして還俗げんぞくせざるものなかりき。その中なかに法道ほうどう

三蔵さんざうと申せし人ひとこそ、勅宣ちよくせんをおそれずして、面かおにかなやき

をやかかれて、江南こうなんと申せし処ところへ流ながされて候そうちいしか。今いまの世よ

の禪宗と申す道士の法門のようなる悪法を御信用ある世
に生まれ、日蓮が大難に値うことは、法道に似たり。

おのおの、わずかの御身と生まれて、鎌倉にいながら、

人目をもはばからず、命をもおしまず、法華経を御信用あ

ること、ただ事ともおぼえず。ただおしはかるに、濁水に

玉を入れぬれば水のすむがごとし。しらざることよき人

におしえられてそのままに信用せば、道理にきこゆるがご

とし。釈迦仏・普賢菩薩・薬王菩薩・宿王華菩薩等の各々の

御心中に入り給えるか。法華経の文に「閻浮提にこの経を

しん ひと ふげんぼさつ おんちから もう
信ぜん人は、普賢菩薩の御力なり」と申す、これなるべし。

によにん 譬 ふじ まつ しゆゆ
女人はたとえば藤のごとし。おところは松のごとし。須臾も

離 た はなれぬれば立ちあがることなし。はかばかしき下人げにんもな

きに、かかる乱れたる世にこのとのをつかわされたる心こころざ

し、大地だいちよりもあつし。地神定めてしりぬらん。虚空こくうより

高 ぼんてん たいしやく 知 たま
もたかし。梵天・帝釈もしらせ給いぬらん。

ひと み どうしよう どうみよう もう ふた 使 てんう
人の身には、同生・同名と申す二りのつかいを、天生てんま

るとき 付 たま かげ み 随
るる時よりつけさせ給いて、影の身にしながらうがごとく、

しゆゆ だいざい しょうざい だいくどく しょうくどく
須臾もはなれず、大罪・小罪、大功德・小功德、すこしも

落

てん

もう

そうろう

ほとけと

たも

おとさず、かわるがわる天てんにのぼつて申し候と仏説き給

てん

知

う。このこと、はや天てんもしろしめしぬらん。たのもしし、

たのもしし。

しがつ

四月 日

にちれん

かおう

日蓮

花押

しじょうきんごどののにようぼうごへんじ

四條金吾殿 女房御返事

おんふみ

ふじしろうどの

にようぼう

つね

寄

合

ごらん

この御文は、藤四郎殿の女房と常によりあいて御覧あ

そうろう

るべく候。